

九、宋代（二）

一、儒教の発展

・「思索する儒者」…〔¹〕

◎〔²〕

「…南宋の朱熹（朱子）はこれらの思想を採り入れて道学を集大成。」

一、一、〔³〕

「…太極図と図説からなる。」

陰陽五行論を中心に宇宙の生成と人間存在のありかたを解き明かす。

太極↓陰陽（形神）↓五行（五性）↓男女（善惡）↓万物（万事）

・〔⁵〕

「聖人可学論」

・学問の自立と自己修養の理想をうたう。（孔子の理想は「君子」）

☆二程（程顥・程頤）…周敦頤に師事し、思索を重ねて新たな哲学「道学」をきずく。

〔⁶〕

「…の概念の提示。「理」（天理）が経験世界を超えた原理として実在。」

一、一、〔⁷〕

「…」

元々「仁」とは他者への共感をいうが、ここでは万物すべてをみずから切実なものとしてとらえるシンパシーとされる。万物への共感は、その後、⁹」

・単なる博識を「玩物喪志」として批判。聖人の心の自得を重んじる。

一、一、〔¹⁰〕

「…」

・「理」と「氣」を明確に区別。「理」…形をもたない（形而上）。「氣」…形をもつ（形而下）。

・〔¹¹〕

「…人間の本質は「仁義礼智信」という「理」をそなえることであり、古代の聖人から普通の人々に至るまですべて同じ。「聖人可学論」を可能にする平等な発想。」

孟子の〔¹²〕

「…を復活させ、人間に生来のランクはないとする。」

（漢く唐…「性三品説」（人間には生まれつき上中下の三つのランクに分かれているとする））

・〔¹³〕

「（敬に居る）…心の敬みを保つ、冷静さを常に保つ、欲望に流されない。」

〔¹⁴〕

「（理を窮める）…すべての物事の理（ことわり）を明らかにしていく。」

一、四、〔¹⁵〕

「…」

「…の哲学。」

氣とはガス状の物質であり、あらゆる存在を構成する基体。世界は氣の集散という自己運動によつて成り立つという自然哲学。万物一体觀をうたいあげる。著書に、『正蒙』『西銘』など。

一、五、〔¹⁷〕

「…」

「…の哲学。」

・〔¹⁹〕

「…『易経』における変化と反復の哲学を応用。」

・「先天易学」（易学理論）を説くとともに「觀物」（数理という視点から物を見る）の思想を唱える。

・〔²⁰〕

・北宋の道学者たちは、儒教に不可欠の要素である儀礼の復興にも取り組む。

・〔²⁰〕

「…「聖人は天にもとづき釈氏は心にもとづく」

・

「…道学道学は、「濂洛関閩の学」（濂溪〔周敦頤〕・洛陽〔三程〕・関中〔張載〕・閩南〔朱子〕）とも呼ばれる。」

・

二、仏教と道教の展開

二、一、【仏教】

次第に活気を失い始める中、盛んだったのが〔²¹〕。〕。

宗教的な信仰よりも自己修行や機知をたつとぶ教えで、宋代の士大夫の好みになかう。

↓〔²²〕

「以後、禪の公案集が続々と編纂される。」

南宋時代、首都杭州や明州を中心とする名刹（名高い寺院）、いわゆる五山を中心に禪が栄える。

このような動向は、南宋後期に入宋した留学僧によつて日本にもたらされる。

二、二、【道教】

北宋の真宗…「天書」が降つたことをきっかけに道教信仰にのめりこむ。

〔²³〕

「…を崇拜。元始天尊から玉皇大帝へと変わる。その後、道教の最高神に。」

徽宗…〔²⁴〕

「…を編纂・刊行、道士を優遇。↓国力の消耗、北宋の滅亡を招く。」

〔²⁵〕

「…瞑想や氣功によつて体内の氣をめぐらせて新陳代謝をはかり、不老長生を目指す。」

唐代は「外丹」が流行していたが、五代から北宋にかけて内丹がとつて代わり、以後、道教修養術の主流となる。内丹思想のバイブル…張伯端『悟真篇』

三、朱子学の成立

〔26〕 ↓ 〔27〕

〔26〕 …近世アジア地域の思想と文化に巨大な影響を及ぼす。

活躍した時代は南宋の最盛期。青年時代、新法党の秦檜〔しんかい〕によって禁圧されていた道学が公認される。

三一、著作

◎〔28〕 …『論語集注』『孟子集注』『大学章句』『中庸章句』

Ⅱ「新注」↑↓「古注」（それまでの注）

・膨大な著作…『四書或問』『周易本義』『書集伝』『詩集伝』『儀礼経伝通解』『家礼』『通鑑綱目』
二程の語録『程氏遺書』『程氏外書』を編纂。『朱文公文集』一〇〇巻、『朱子語類』一四〇巻。

・〔29〕 …

三二、呂祖謙との共編。北宋五子の言葉の中から初学者に適当なものを選びだした宋学の入門書。
三〇の理想…『大学章句』の序に見えることば。

みずからの人格を陶冶する（みがき養う）とともに、社会の指導層として貢献する。

学問修養は学問修養として完結せず、これを社会的に実践し、世の中を改善していくことが求められる。儒教の理念を要約した語。『大学』の八条目（格物・致知・正心・誠意・修身・齐家・治国・平天下）が学問・自己修養から社会・政治実践へと至るプロセスを示す物として重視される。

三三、存在の理論…すべて「理」と「気」によって構成される。

◎〔31〕 …「理学」、存在論。

〔32〕 …存在物を存在物たらしめる形而上的原理。事物がそうである根拠。

〔33〕 …物を作る形而下な材料。物がそのようなものであるべき原則。

人間で言えば、人間存在の理は「仁義礼智信」であり、これこそが人間を人間たらしめているゆえんであり、人間が獣や植物と区別される本質（存在規定）である。

・張載の「気」の哲学を発展。「理」と「気」の概念により、壮大な自然哲学が立てられる。

三四、人間とは何か

孟子の〔34〕、程頤の〔35〕 …張載の「心は性情を統ぶ。」の説が重要。

張載の「心は性情を統ぶ。」…心には性（理）と情とが内在している。

心Ⅱ性（仁義礼智信）＋情（↓欲望） 心Ⅱ理性（善）＋感情（悪）

〔36〕 …理と気が結びついた人間の現実性。

〔37〕 …「氣質の性」から理だけを取り出して表現。

性は人間すべてに共通する理であるから、個々の違いを表現することができないが、気の理論を導入することで人間存在のあり方がより詳細に説明されることになった。

（人間の性（本質）Ⅱ仁義礼智信という理が人間を人間たらしめている。動物との違い。）

「天理を存し、人欲を滅す」…〔38〕 …と〔39〕 …（私欲）を峻別する。

心の中にひそむエゴイステイックな「私」を否定して、天理という「公」のもとに従わせる。

三五、居敬と窮理—程頤を継承

〔40〕 …「敬」（心のつつしみ）を守ること。「常に冷静であれ」

〔41〕 …理を窮めるⅡ物事すべての正しい道理を見極める。「豁然貫通」。

正しい認識と社会実践を導くもの。実証学に通じる面ももっていた。

サイエンスの訳語Ⅱ〔42〕 …（格物致知Ⅱ朱子学の窮理）

三六、教育の解放と科挙批判

『大学』の冒頭「親民」↓「新民」…自己改革のみならず他者変革の視点を鮮明にする。

・〔43〕 …八歳で入る。掃除や挨拶、行動のけじめ、礼儀や読み書き、算数などの基礎事項をきまりとおりに学ぶ。「日常的しつけ」『小学』をテキストとする。

・〔44〕 …十五歳で入る。高等な理論や自己修養、政治や社会について学び、考察する。
「理論および社会的行動」〔45〕 …と〔46〕 …を読む。

教育の対象を特権階層に限定せず、庶民階層へと広げる。科挙のための学問を厳しく批判。

書院や精舎といわれる民間施設で講学を行う。（私立の学校↑↓官学）

◎〔47〕 …朱熹が復興した江西廬山の書院。

「白鹿洞書院揭示」は、朝鮮・日本の書院・私塾での教学モットーとして普及。

三七、儀礼の研究—〔48〕

儒教の冠婚葬祭儀礼を一般庶民にも実行できるようにした簡便な儀式マニュアル。後世の模範に。